

**地域におけるひとり暮らし高齢者の生活ニーズと
住民による支え合いへの期待
—佐賀県の高齢者を対象としたアンケート調査から—**

**Needs for the lives of single elderly people and expectation for mutual support in a local community
—from a questionnaire survey to the elderly people in Saga prefecture—**

倉田 康路

Yasumichi KURATA

地域におけるひとり暮らし高齢者の生活ニーズと 住民による支え合いへの期待 —佐賀県の高齢者を対象としたアンケート調査から—

倉田 康路

(西九州大学健康福祉学部社会福祉学科)

(平成25年11月13日受理)

**Needs for the lives of single elderly people and expectation for mutual support in a local community
—from a questionnaire survey to the elderly people in Saga prefecture—**

Yasumichi KURATA

Department of Social Welfare Science , Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University

(Accepted: November 13 , 2013)

Abstract

This report is to reveal needs for the daily lives of single elderly people and a mutual support system in a local community, based on a questionnaire survey. There were 3,030 households of single elderly people surveyed in Saga prefecture (2,590 answers were collected). The results of the survey were mainly as follows: (1) regarding single elderly people's relations with their families and people around them in a daily life, in a case where they need a certain level of support in their daily lives, it seems that they expect more support from their families than their neighbors; (2) about 10% of single elderly people have little contact with their neighbors and those around them and there are concerns that they might isolate themselves; (3) as to their health, 60% of them go to hospitals regularly and one third of them have some trouble in their daily lives. Their main concerns are illnesses (about 30%) and nursing care (about 30%), so a medical assistance system is needed; (4) with respect to a mutual support system in a local community, 60% of them endorse a paid support system (to get support services at a low rate), and structuring the system in a local community is expected.

キーワード：ひとり暮らし高齢者、生活ニーズ、地域での支え合い、アンケート調査

Key words : single elderly people, needs for daily lives, mutual support in a local community, questionnaire survey

． 緒 言

国民生活基礎調査（厚生労働省，2011）¹⁾によると、現在、子どもと同居する高齢者の割合は約4割（42.2%）であり、約30年前（1980年）の約7割（69.0%）から急激に低下する一方で、「夫婦のみ」（37.2%）、「ひとり暮らし」（16.8%）の高齢者だけの世帯が増加する傾向にある。在宅の高齢者の半数は高齢者だけで暮らしている状況となっている。

これまでに高齢者の生活支援については、その多くを子どもとの同居によってカバーされてきたものが、同居世帯が減少するなかで子どもに代わる人的な生活支援を確保することが課題となっている。とりわけ、高齢者が在宅で生活していくうえで、身体的、精神的、社会的にリスクが高く、このことにともない生活支援ニーズが高い存在としてあげられるのがひとり暮らし高齢者であろう。

小谷（2012）²⁾によると一般の高齢者を対象とした調査結果から、ひとり暮らしに限らず、高齢者の多くが、配偶者に先立たれた後の生活、ひとり暮らしや孤独になることなど遺されることへの不安を抱き、将来的にひとりで暮らすことを予測していると報告している。同調査ではひとり暮らし高齢者の半数以上が「自分は孤独死するかもしれない」という不安を抱いていることも報告されている。ひとり暮らし高齢者にかかわる不安は、当事者のみならず国民に共通した不安としてあげられよう。

また、井上（2011）³⁾はひとり暮らし高齢者の不安を踏まえ社会的孤立を危惧し、ニーズに応じた社会福祉の役割を期待している。同様にひとり暮らし高齢者などへの地域での支え合いの取り組みの必要性が多くに期待されている（上野谷，中田など）⁴⁾⁵⁾。

そこで本稿では、ひとり暮らし高齢者の在宅での生活に焦点をあてて、対象者の周囲とのかかわりを含めて日常生活上のニーズや同ニーズに対応する地域支え合いに対する期待についてアンケート調査に基づき明らかにすることを試みるものである。本調査においては対象地域の限定が認められるものの、一定規模での回答が得られたことからここに報告したい。

． 方 法

(1) 調査対象

ひとり暮らし高齢者として佐賀県内（佐賀市、嬉野市、神埼市）に在住するひとり暮らし高齢者世帯3,030世帯（名）を対象とした。回収数は2,590世帯（名）、回収率は85.4%であった。

(2) 調査方法

アンケート調査票を作成し、対象世帯ごとに民生委員

などに依頼して訪問により記入してもらった。

(3) 調査内容

基本的属性のほか、家族との関わりやその程度、近隣との関わりやその程度、支えてくれている人の存在、日常生活での困りごと、地域の支え合いなど15の項目を設定した。

(4) 倫理的配慮

調査協力者としての民生委員などには調査の目的を説明し、理解を得たうえで、これまでにかかわりがあり、予め承諾が得られたひとり暮らし高齢者世帯を訪問してもらうことを前提として、対象者に対して回答したくない設問への回答は拒否できること、調査結果は固有名詞など使用せず特定化できないよう処理することなどを説明してもらい、長時間となり負担がかからないように配慮することを要請した。

． 結 果

(1) 家族、近隣、友人などとのかかわり

家族とのかかわり（顔を合わせること）については（図1）「月に1回程度」（23%）と「週に1回程度」（21%）の合計が約4割となっており、これらの程度の関わりを標準としているものとなっている。家族とのかかわりのない「ほとんどない」も約1割（13%）みられる。

また、家族とのかかわりの程度に対する満足感については（図2）約半数（51%）が「満足」と回答している

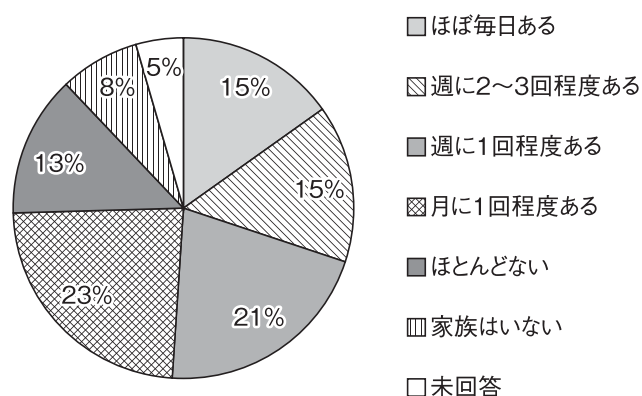


図1 家族とのかかわり

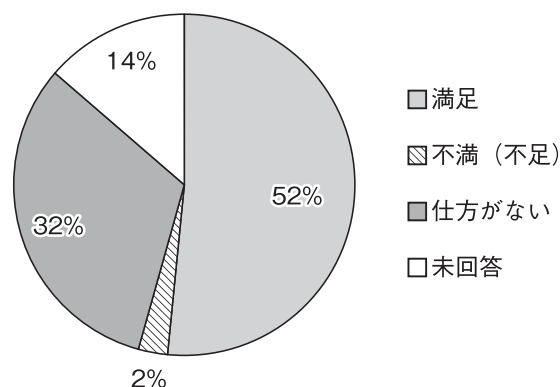


図2 家族とのかかわりに対する満足度

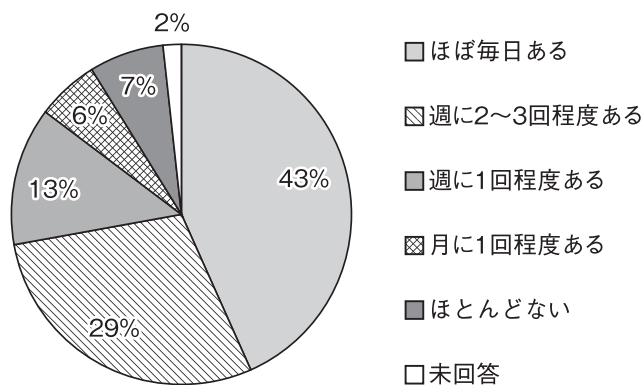


図3 近隣との関わり方

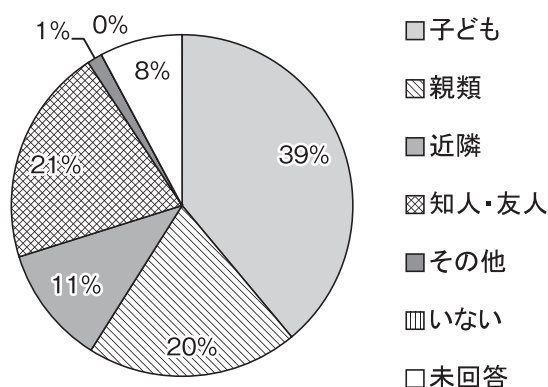


図4 支えてくれる人

一方で、「仕方がない」とするあきらめの気持ちが約3割（32%）存在する。家族とのかかわりをもっと持ちたいという気持ちを持ちながら、家族の負担や現在の環境などからあきらめるしかないとするひとり暮らし高齢者の複雑な心境がうかがわれる。

近隣とのかかわりについては（図3）「ほぼ毎日ある」が約4割（43%）、「週に2～3回程度」約3割（29%）と、家族とのかかわりに比べて頻度が高い傾向がうかがわれる。しかし、「月に1回程度ある」（6%）「ほとんどない」（7%）とかかわりがほとんどない割合も1割を超えている。また、近隣とかかわりをもつ人の存在としては（複数回答可）「立ち話をする程度の人がいる」約4割（39%）「お互いに訪問しあう人がある」約3割（31%）「あいさつをする程度の人がある」（26%）に分散している。

親しい友人とのつきあいについては、「週に1回以上連絡を取る」（38.1%）を中心に、「ほとんど毎日連絡を取る」（19.9%）「月に1回以上連絡を取る」（19.5%）などとなっている。「特に親しい友人はいない」も1割以上（12%）存在していた。

(2) 支えてくれている人の存在

心配事や悩みを聞いてくれる存在として（図4）「子ども」（39%）が最も多く、以下、「知人・友人」（21%）「親類」（20%）「近隣」（11.0%）となっている。

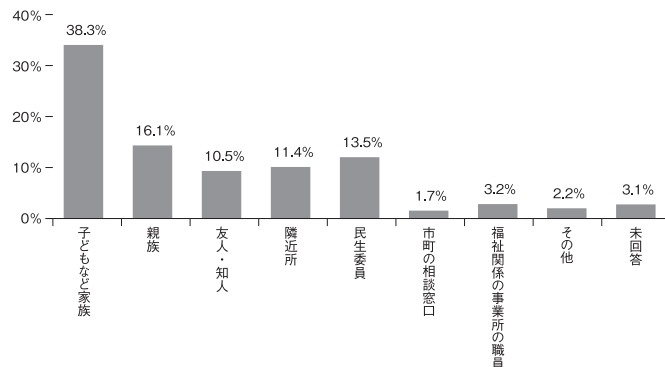


図5 ちょっとした困りごとについての頼み先

思いやってくれたり、気を配ってくれる存在として、「子ども」（38%）が最も多く、以下、「親類」（21%）「知人・友人」（21%）「近隣」（15%）となっている。

ちょっとした用事を頼める存在として、「子ども」（35%）が最も多く、以下、「親類」（19%）「近隣」（17%）「知人・友人」（16%）となっている。

数日間（短期間）の看病や世話をしてくれる存在として、「子ども」（49%）が約半数を占め、以下、「親類」（19%）「知人・友人」（5%）「近隣」（3%）となっている。この質問に対しては他の質問に比べて「未回答」（21%）の割合が高くなっており、回答しにくかったものと思われる。

長期間の看病や世話をしてくれる存在として、「子ども」（45%）が半数近くを占め、以下、「親類」（12%）「その他」（3%）「知人・友人」（2%）となっている。この質問についても「未回答」（36%）の割合が4割近くを占めている。

また、日常生活のちょっとした困りごとを誰に頼みたいと思うかについて（図5）「子どもなど家族」（38.3%）が最も多く、以下、「親族」（16.1%）「民生委員」（13.5%）「隣近所」（11.5%）「友人・知人」（10.5%）となっている。

家族や親族という血縁関係にある存在への依頼を中心に、民生委員への期待も比較的高くなっている。

(3) 健康状態と食生活

健康状態について、「普通」（35%）を含めて、「まあ良い」（22%）「よい」（16%）の比較的良好な健康状態にある者の割合が約7割、「あまり良くない」（20%）および「良くない」（3%）の割合が約2割となっている。

病院への通院の状況については、現在通院している割合が半数以上の約6割（61.6%）存在し、そのうち日常生活に支障があると回答する者が3分の1を占める。

次に食事の仕度について、食事を自分で作っているかということに対しては8割以上（84%）が「自分で作る」と回答している。以下、「その他」（5%）「家族が作る」（4%）「作らない」（3%）となっている。また、食

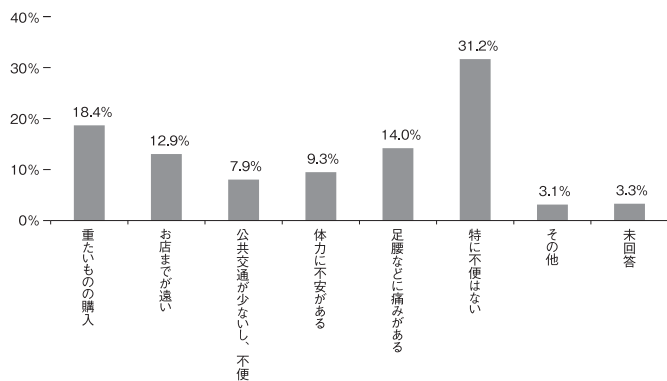


図6 食材購入の際の不便な理由

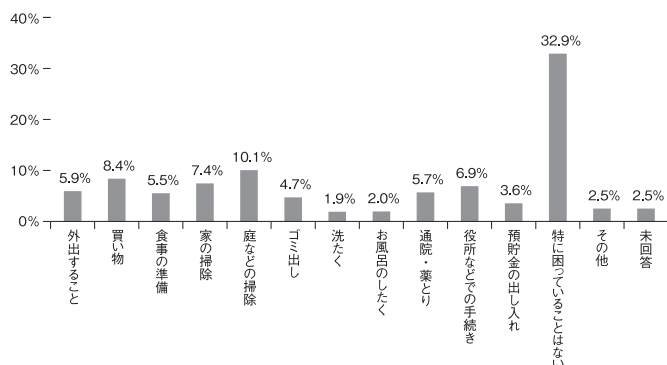


図8 日常生活での困りごと

材の購入について、まず、頻度では「週に2回程度」（40％）と「週に1回程度」（23％）の合計が半数以上を占めている。購入者については、「自分で行く」が約8割（76％）を占め、「家族が行く」（10％）、「その他」（9％）となっている。

さらに、購入方法（自分でいく場合）については、「自動車」（29.6％）が最も多く、「徒歩」（26.8％）、「自転車」（20.3％）などとなっている。「バス」を利用する割合も1割近く（7.4％）存在する。

食材購入の際の負担として、食材の購入の際に不便があるかについて（複数回答可、図6）「特に不便はない」と回答した割合は約3割（31.2％）で、約7割は何らかの不便を感じている回答となっている。負担の高いものとして、「重たいものや大きいものの購入が不便」（18.4％）「足腰などに痛みがある」（14.0％）「お店までが遠い」（12.9％）などがあげられている。

(4) 日常生活での心配事や困りごと

日常生活での心配事にはどのようなことがあるかについて（複数回答可、図7）「病気のことで」（26.8％）「介護が必要になったときのこと」（26.3％）など医療・介護に関することを中心に、災害、収入、先祖の祭祀、家族のことなどさまざまな心配事があげられている。「特に心配はない」との回答は1割程度（14.2％）であり、9割の者は病気や介護のことを中心に日常生活での心配事がかえながら生活している状況となっている。

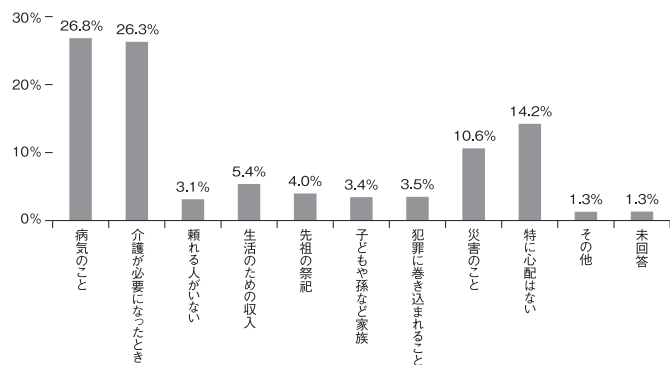


図7 日常生活での心配事

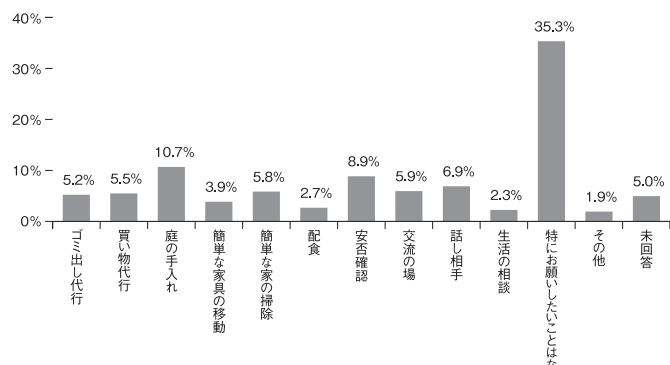


図9 地域での支え合いへの期待

次に日常生活での困りごとについて（複数回答可、図8）「特に困っていることはない」約3割（32.9％）を除く、約7割が何らかのことについて困りごとをかかえている状況がうかがわれた。困りごととして回答の割合が高かったものとして、「庭などの掃除」（10.1％）「買い物」（8.4％）「家の掃除」（7.4％）「役所などでの手続き」（6.9％）などがあげられる。

(5) 地域での支え合いへの期待

地域での支え合いとしてお願いしたいことについて（複数回答可、図9）「特にお願いしたいことはない」（35.3％）を除く、約6割が地域での支え合いを期待する回答となっており、お願いしたいことの内容として、「庭の手入れ」（10.7％）「安否確認」（8.9％）「簡単な家の掃除」（7.5％）「話し相手」（6.9％）「交流の場」（5.9％）などとなっている。

あげられている内容として、「庭の手入れ」や「家の掃除」など家事的支援とともに、「安否確認」、「話し相手」などひとり暮らしの不安な気持ちから生じる精神的支援が求められるものとなっている。

次に地域の支え合いを受ける場合の有償制について（図10）地域の支え合いを受ける場合、多少のお金がかかってもお願いしたいものがあるかに対して（複数回答可）「特にお願いしたいことはない」（41.4％）を除く、約6割が地域での支え合いを期待する回答となっており、お願いしたいことの内容として、「庭の手入れ」

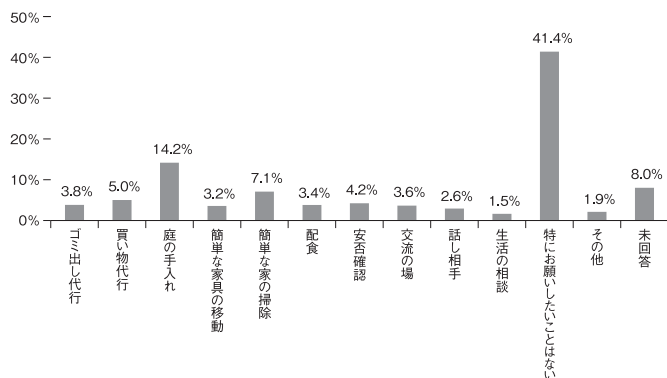


図10 地域の支え合いを受ける場合の有償制

(14.2%)「簡単な家の掃除」(7.1%)「買い物代行」(5.0%)などがあげられている。

また、地域の支え合いが有償の支援の場合、1時間(1回)当たりの金額はどのくらいが適当だと思うかについて、「500円」(17.6%)、「300円」(11.3%)、「200円」(7.6%)、「100円」(6.1%)、「100円未満」(4.8%)など500円以下の金額の割合が高くなっている。

・考 察

(1) 家族、近隣との距離間

ひとり暮らし高齢者の人とのかかわりについて、家族とのかかわりで「月に1回程度」(約2割)「週に2～3回」(約2割)が中心であるのに対して、近隣とのかかわりでは「ほぼ毎日」約4割、「週に2～3回」3割などとなっており、家族、知人・友人、近隣のなかでは近隣を中心としてかかわりをもっている実態となっている。

近隣と比較して少ないかかわりをもつ家族とのかかわりに対して、それでも「満足」(約5割)とする回答とともに、「仕方ない」(約3割)とする回答も多くを占めていることなどから、ひとり暮らし高齢者においては日常生活のなかで家族とのかかわりへの期待をもちながらも、負担をかけることへの遠慮やあきらめという複雑な心境をもって一定の距離をおき、代わって、身近な存在としての近隣との距離間を接近させているものとなっている。

日常生活上でかかわりということから家族より近隣との距離間が近い関係性が指摘されるのに対して、支えてくれる存在、困りごとへの依頼という一定程度に生活上の支援を必要とする場面では、近隣より家族への期待が高くなる傾向がうかがわれた。その期待の高さは、近隣、知人・友人、親族、家族という順で親密性が強くなるにしたがって高くなっていく。そして、支えること、困りごとへの依頼の内容の違いにより(悩みを聞いてくれる、ちょっとした用事、短期間の看病や世話、長期間の看病や世話など)その内容について支える側の負担が

大きくなるにしたがって一層、家族への期待が高くなっていく傾向がうかがえる。

ひとり暮らし高齢者においては日常生活において近隣とのかかわりを中心にもちながら近い距離間にいるものの、支援の負担が高くなる場面においては親密性の強い家族・親族などへの期待を高め、距離間を接近させることになる。このことから、ひとり暮らし高齢者への地域支援においては、日常生活において見守り支援などに機能する近隣など住民相互による支援ネットワーク、また、一定の負担をともなう困りごとなどへの支援に機能する知人・友人、親族、家族など親密的な関係性をもつ者からなる支援ネットワークが必要になるものと考えられる。ただし、親密的な関係による支援ネットワークにおいても重介護などのレベルでの支援には限界が認められ、介護保険サービスなどフォーマルサービスの利用が期待される⁶⁾。

(2) 孤立化防止の点から

ひとり暮らし高齢者世帯においては他の世帯形態に比べて孤立した生活形態になることが危惧されるが、本調査において家族・親族、知人・友人、地域住民を含めて対象者の約1割が周囲の人たちとのかかわりをほとんどもっていないという結果となっており、該当者の孤立化が心配される。該当者の特徴として、年齢層として前期高齢者より75歳以上の後期高齢者の年齢層、性別として女性より男性が割合的に高いものとなっている。すなわち、高い年齢層において生じる心身機能の低下、また、男性における消極的なコミュニケーションなどが影響しているものと推測される。

地域とのかかわりに消極的なひとり暮らし高齢者は全国的に増加する傾向にある。このような対象者においては、食事、医療、健康管理など必要とされることが得られないままに日常生活が乱れることにつながりやすくなるとも指摘されており⁷⁾、近年、社会的問題とされる「孤独死」「孤立死」(看取る人が誰もいない状態での死)の予備群としてとらえられることができよう。

このことから孤立化を防止するための地域における高齢者見守りネットワークの必要性があげられる。高齢者見守りネットワークの構築にむけては、特に地域住民によるインフォーマルネットワークが重要となり、日常の声かけなど近隣、知人・友人などを中心とした取り組みをはじめ⁹⁾、人口規模、住民意識、社会資源の配置の違いなど地域の特性に応じて、フォーマルネットワークとともに、部分的、段階的に図っていく必要があるものと思われる。

地域における高齢者の孤立化防止にむけては、まずは、対象者を発見し、把握することを起点として、住民が身近に頼れる人を意識できるような住民間のつながり

を築くための取り組みが求められる¹⁰⁾。さらには、このような「住民間のつながり、見守りシステム」とともに、対象者の地域への「誘い出し」システム、誘い出したうえでの「集団の場づくり」システムをつくりだしていくことが期待される¹¹⁾。

(3) 医療ニーズの拡大

本調査の回答から健康状態について約6割が通院しており、そのうち3分の1は日常生活に支障を感じるものとなっている。また、心配ごととしてあげられていることの中心は病気のこと(約3割)や介護のこと(約3割)であることなどから、ひとり暮らし高齢者において医療支援のニーズが拡大している状況にあるものといえる。

高齢者介護において在宅介護の推進が図られることと連動して、医療分野においても医療機関における入院対象として急性期患者を中心とし、慢性期患者においては在宅医療の対象として通院や訪問により治療することが推進される状況にあるなかで、本調査の結果から、生活支援という枠組みのなかに、介護と医療をセットにして位置づけて支援していくことが極めて重要になっているといえよう。

医療サービスを利用する通院という場面から、ひとり暮らし高齢者においては特に移動のリスクが大きいことから通院を妨げる要因を有し、さらには、医療機関の少ない地域や過疎、限界集落などの地域に居住する同高齢者などにおいてその要因は増大することとなる。

なお、移動上に支障をもたらすという生活上のリスクは食にかかわるニーズにおいても本調査から強調される。食について約8割が「自分で食事を作る」と回答されていることから、作ることの自立はうかがわれるものの、食材購入については約7割が不便(負担)を感じている結果となっており、食材購入で約1割はバスを使って購入するという状況にある。生命の維持にかかわる通院や買い物をも可能とする移動を確保するための支援は急務ともいえよう。

(4) 地域での支え合いの意義

上述した高齢者の見守りネットワークを構築することを含めて地域において支え合いを図っていくことの意義については、本調査での生活上の困りごとや地域での支え合いへの期待の結果からも見出すことができる。

生活上の困りごとについては、約7割が日常生活上に困りごとをかかえており、困りごとの内容は既に述べたようにさまざまであるが、いずれもいわば「ちょっとしたささえ」があれば解決できる内容ともなっている。上述のとおり、大きな負担をとまなう支援である場合には親密性の強い家族等の関係にある存在への期待が高くなる傾向がうかがわれるが、「ちょっとしたささえ」とし

ての軽微な日常生活上の支援については近隣など地域住民への期待が高まり、本調査においても約6割が地域での支え合いを期待するものとなっている。そして、その支え合いの内容は、家事的支援(家の掃除、庭の手入れなど)とともに精神的支援(安否確認、話し相手など)を含む。ここに地域での支え合いのニーズや意義が認められよう。今後、地域を基盤としたソーシャルワークの視点から、「個を地域で支える援助」とともに、その援助を可能とする援助ともいえる「個を支える地域をつくる援助」が一体的に推進されることが求められるところである¹²⁾。

期待されている地域の支え合いについては、その形態として有償制を支持する割合が約6割の半数以上を占めていることにも着目する必要があるといえよう。無償制の場合に指摘されるデメリットとして、一般にボランティア活動一般にも該当する、恣意性、主観性、無責任性などがあげられるが¹³⁾、有償制の場合、支えられる(利用する)側の立場からして対価を払うことにより支える(提供する)側と対等性が図られ、支えられることへの抵抗感や遠慮が逡巡することにつながり、支える側の立場からしても対価を受け取ることにより責任性が強化されることにつながるとも考えられる。

このような有償型ボランティアともいえる住民型在宅福祉サービスについては、主にこれまでに都市部で広がりを見せ、展開される傾向にあったといえるが、本調査の対象地域であった地方部での結果を通して、これからの地域支え合いのシステムを構築していくうえで期待される形態といえよう。

[付記]

本調査は佐賀県健康福祉本部よりの委託研究「佐賀県の未来の福祉事業」(代表倉田康路)の一環として実施されたものである。調査に協力いただきました多くのひとり暮らし高齢者ならびに民生委員の方々に心から感謝いたします。

注

- 1) 厚生労働省「国民生活基礎調査」2011.
- 2) 小谷みどり「ひとりで暮らす高齢者の問題 ―孤独の不安―」『Life Design REPORT (Winter)』, 2012.
- 3) 井上信宏「一人暮らし高齢者の住まいと社会的孤立」『社会福祉研究(第110号)』鉄道弘済会, 2011.
- 4) 上野谷加代子「高齢者の地域生活を支える新しい福祉システム」『社会福祉研究(第89号)』鉄道弘済会, 2004.
- 5) 上野谷加代子「高齢者が高齢者を支援する」『社会福祉研究(第89号)』鉄道弘済会,

- 6) 石田路子「単身高齢者の生活支援と親族ネットワーク」『日本の地域福祉(第14巻)』日本地域福祉学会, 2004.
- 7) 岡村絹代「過疎地域における女性独居高齢者の食生活の構成要素」『介護福祉学(第19巻第1号)』日本看護福祉学会, 2012.
- 8) 久保美由紀「会津若松市における一人暮らし高齢者の生活状況」『会津大学短期大学部研究年報(第65号)』会津若松大学短期大学部, 2008.
- 9) 山口麻衣・冷水豊・斉藤雅茂・武居幸子「大都市独居高齢者の近隣住民・知人による声かけ・安否確認に対する選好」『日本の地域福祉(第24巻)』日本地域福祉学会, 2001.
- 10) 福島忍「都市住宅における孤独死の不安を抱える一人暮らし高齢者の特性」『日本の地域福祉(第26巻)』日本地域福祉学会, 2013.
- 11) 竹内孝仁「高齢者支援をめぐる課題 —孤立化、引きこもり高齢者への対応—」『社会福祉研究(第89号)』鉄道弘済会, 2009.
- 12) 岩間伸之「地域を基盤としたソーシャルワークの特質と機能 —個と地域の一体的支援の展開に向けて—」『ソーシャルワーク研究(37-1)』相川書房, 2013.
- 13) 朝日新聞「ボランティアここが困る—受ける側から見直そうシンポジウム—」朝日新聞者, 1991(6.10).